

日本英文学会九州支部第 79 回大会

期日 2026 年（令和 8 年）
10 月 24 日（土）・25 日（日）

場所 九州大学伊都キャンパス
（福岡市西区元岡 744）

日本英文学会九州支部

〒811-4192 福岡県宗像市赤間文教町 1-1

福岡教育大学教育学部

後藤美映研究室内

E-mail: elsj.kyushu.branch@gmail.com

HP: <https://kyushu-elsj.sakura.ne.jp>

2025-26 年度 日本英文学会 九州支部 理事一覧

秋好 礼子 (福岡大学)
鵜飼 信光 (九州大学)
大島 由起子 (福岡大学)
後藤 美映 (福岡教育大学)
小林 潤司 (鹿児島国際大学)
高野 泰志 (九州大学)
竹内 勝徳 (鹿児島大学名誉教授)
竹安 大 (福岡大学)
鶴田 学 (福岡大学)
中村 嘉雄 (九州大学)
西岡 宣明 (関西外国語大学)
前田 雅子 (九州大学)
松元 浩一 (長崎大学)
宮川 美佐子 (福岡女子大学)
村尾 治彦 (熊本県立大学)

2026 年度 日本英文学会 九州支部 事務局員一覧

支部長・日本英文学会理事	後藤 美映
副支部長	中村 嘉雄
『九州英文学研究』編集委員長	高野 泰志
事務局長	鶴田 学
書記	西村 恵
書記	坂井 隆
書記	吉村 理一
書記	竹安 大

2026 年度 日本英文学会九州支部第 79 回大会 開催校委員一覧

中村嘉雄（開催校責任者）、鵜飼信光、大津隆広、大塚知昇、高野泰志、永川とも子、前田雅子、吉村理一

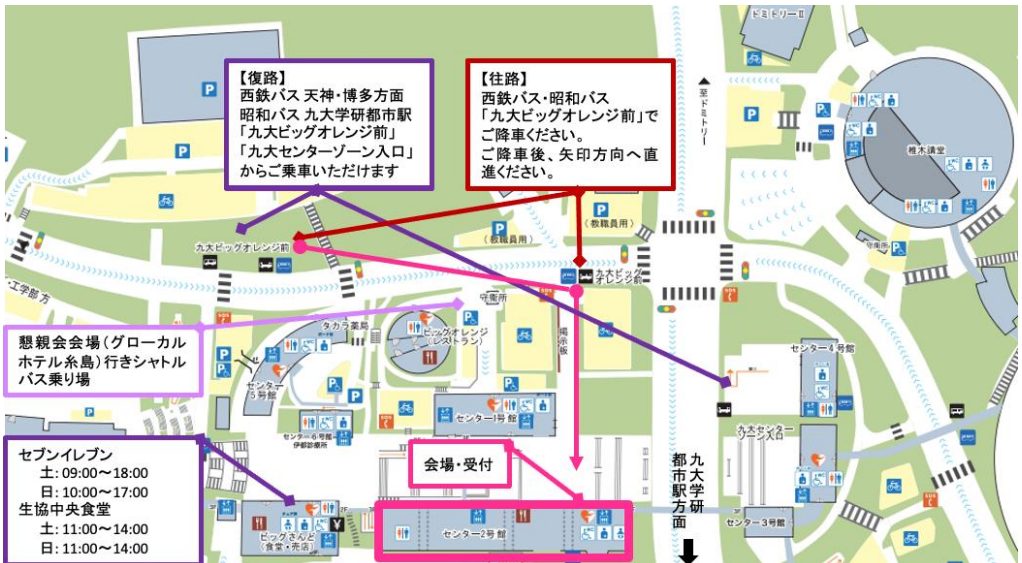
2026 年 日本英文学会九州支部第 79 回大会 開催会場について

1. 日時・会場

日時：2026 年 10 月 24 日（土）・25 日（日）

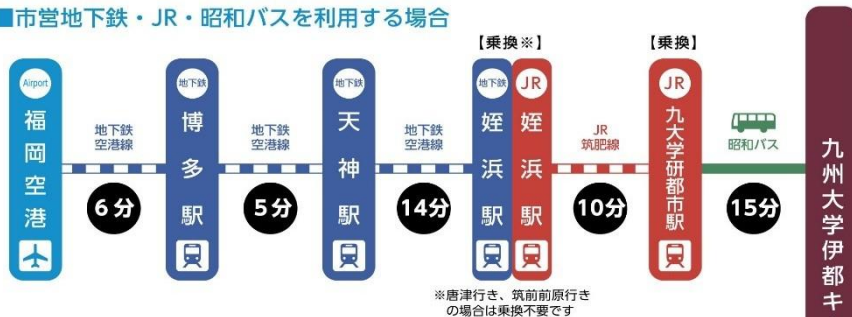
会場：九州大学伊都キャンパス（〒819-0395 福岡市西区元岡 744）センターゾーン・2 号館

[3088C99373424D5F32303232303732355F8A6791E5907D82CC94CD88CD2E706466](https://doi.org/10.3088C99373424D5F32303232303732355F8A6791E5907D82CC94CD88CD2E706466)

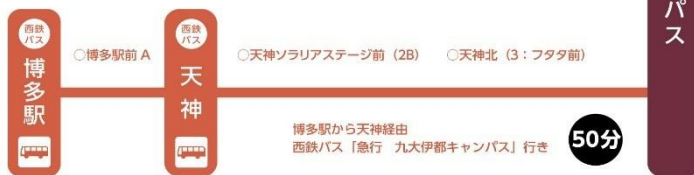


2. アクセス

■市営地下鉄・JR・昭和バスを利用する場合



■西鉄バスを利用する場合 ※



●市営地下鉄・JR 筑肥線

市営地下鉄空港線 (JR筑肥線直通) の筑前前原／唐津方面行きに乗り、「九州大学研都市駅」までお越しください。

●昭和バス <https://showa-bus.jp/>



<往路>

九州大学研都市駅 ～ 九大ビッグオレンジ前
(行き先番号 1 ・ 3 伊都営業所行 または 2 A九大東ゲート行)

※九大中央図書館 または 九大イーストゾーン行きにご乗車されますと遠回りですので、ご注意ください。

<復路>

センターゾーン入り口 ～ 九州大学研都市駅
(行き先番号 1H, 2, 3)
九大ビッグオレンジ前 ～ 九 大学研都市駅
(行き先番号 1, 2A, 3)

●西鉄バス

<https://jik.nishitetsu.jp/>



<往路>

博多駅前A ～ 天神ソラリアステージ前 ～ ビッグオレンジ (急行K)

<復路>

ビッグオレンジ発 ～ 九大センターゾーン入り口 ～ 天神ワンビル前
～ 博多駅センタービル前E (急行K)



(ご注意)

●来校には公共交通機関をご利用下さい。

●宿泊施設情報については、下記の日本英文学会九州支部のホームページをご覧ください。

<https://kyushu-elsj.sakura.ne.jp>



日本英文学会九州支部ホームページ QR コード

開催期間中の食事と懇親会について

●今年度は事務局が会員用のお弁当を手配することはいたしませんので、昼食はご自身でご準備下さい。

なお、開催期間中、学内のセブンイレブンと生協中央食堂は営業しております。

【営業時間】

・セブンイレブン

土：9:00～18:00 日：10:00～17:00

・生協中央食堂

土：11:00～14:00 日：11:00～14:00

●24日(土)午後6時30分よりグローカルホテル糸島コンベンションホールにて懇親会(一般会員7000円、学生会員4500円)を開催いたします。参加については懇親会予約用フォーム(QRコードまたはリンク)から申し込みください。**締め切りは10月10日(土)とさせていただきます。**

<懇親会予約用 QR コード>



<懇親会予約用リンク>

[第79回日本英文学会九州支部大会懇親会の予約フォーム\(予約締切：2026年10月10日\)](#)

※受付にて懇親会費をお支払いの際は釣銭のないようお願い致します。

※当日、大会会場から懇親会会場まで、懇親会会場から JR 九大学研都市駅までシャトルバスを手配しております。出発時刻や場所等は当日ご案内いたします。

会場案内 (2号館平面図)

4階

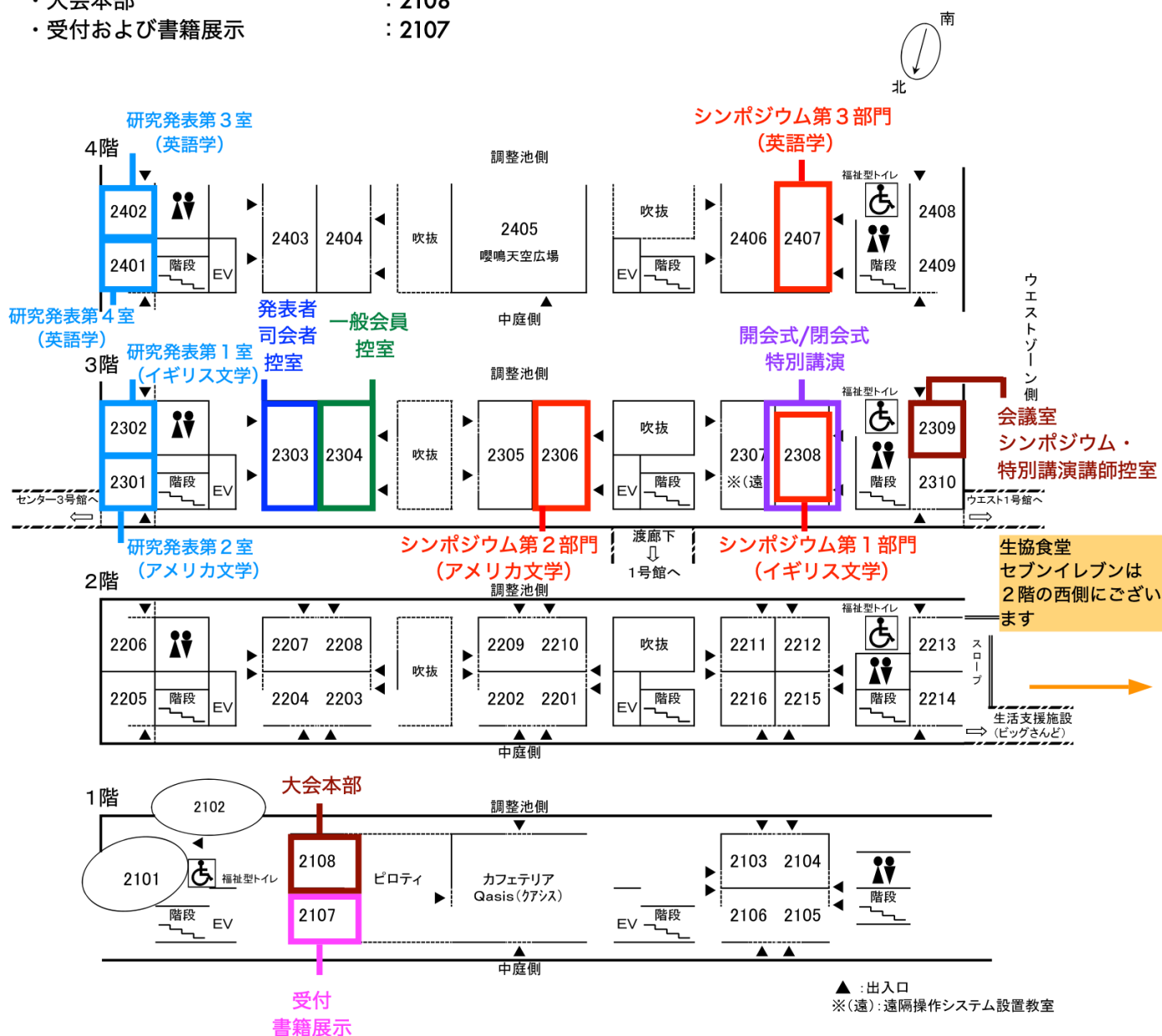
- ・研究発表第3室 (英語学) : 2402
- ・研究発表第4室 (英語学) : 2401
- ・シンポジウム第3部門 (英語学) : 2407

3階

- ・編集委員会、理事会・評議員会 : 2309
(理事、評議委員、編集委員の控室)
- ・開会式・特別講演・閉会式 : 2308
- ・研究発表第1室 (イギリス文学) : 2302
- ・研究発表第2室 (アメリカ文学) : 2301
- ・シンポジウム第1部門 (イギリス文学) : 2308
- ・シンポジウム第2部門 (アメリカ文学) : 2306
- ・研究発表者/司会者控室 : 2303
- ・シンポジウム/特別講演講師控室 : 2309
- ・一般会員控室 : 2304

1階

- ・大会本部 : 2108
- ・受付および書籍展示 : 2107



大会日程

10月24日(土)

開 会 式 (13時00分)

センターゾーン・2号館 2308

研 究 発 表 (①13時30分～14時05分 ②14時10分～14時45分)

第1室 (イギリス文学)

センターゾーン・2号館 2302

第2室 (アメリカ文学)

センターゾーン・2号館 2301

第3室 (英 語 学)

センターゾーン・2号館 2402

第4室 (英 語 学)

センターゾーン・2号館 2401

シンポジウム (15時00分～17時30分)

第1部門 (イギリス文学)

センターゾーン・2号館 2308

第2部門 (アメリカ文学)

センターゾーン・2号館 2306

第3部門 (英 語 学)

センターゾーン・2号館 2407

懇 親 会 (18時30分～20時30分) (会費 7000円 学生 4500円)

10月25日(日)

研 究 発 表 (①10時00分～10時35分 ②10時40分～11時15分 ③11時20分～11時55分 ④12時00分～12時35分)

第1室 (イギリス文学)

センターゾーン・2号館 2302

第2室 (アメリカ文学)

センターゾーン・2号館 2301

第3室 (英 語 学)

センターゾーン・2号館 2402

特 別 講 演 (13時30分)

センターゾーン・2号館 2308

閉 会 式 (15時00分)

センターゾーン・2号館 2308

日本英文学会九州支部第 79 回大会プログラム

日 時：2026 年 10 月 24 日（土）・25 日（日）

場 所：九州大学伊都キャンパス センターゾーン・2 号館

第 1 日 10 月 24 日（土）

（受付は正午よりセンターゾーン 2 号館 1 階 2107 にて行います。受付では年会費の納入はできません。）

開会式 13 時 10 分より（センターゾーン・2 号館 2308）

	司会・福岡大学教授	坂井 隆
開会の辞	支部長・福岡教育大学教授	後藤 美映
開催校挨拶	九州大学大学院人文科学研究院長	青木 博史
開催校案内	九州大学教授	中村 嘉雄
事務局報告	事務局長・福岡大学教授	鶴田 学
優秀論文賞等選考報告	編集委員長・九州大学教授	高野 泰志

研究発表（①13 時 30 分～14 時 05 分 ②14 時 10 分～14 時 45 分）

第 1 室（センターゾーン・2 号館 2302）

司会 九州大学 西あゆみ

1. 自分の人生を生きるとは——*The Blue Castle* における Valancy の意思決定と自由意思

福岡大学・院 高橋ひとみ

司会 鹿児島県立短期大学 野田ゆり子

2. 歌う Lúthien、語られる Arwen——Tolkien 作品における女性表象をめぐって

九州大学・院 松本康太

第 2 室（センターゾーン・2 号館 2301）

司会 九州国際大学 松下紗耶

1. “Nature held a balance and kept a book”: Rereading *Absalom, Absalom!* from an EcoGothic Perspective

九州大学・院 Hu Wenhui

司会 九州国際大学 松下紗耶

2. 変貌する「物」たち——Toni Morrison の *Jazz* における都市・南部・食

九州大学・院 山口沙瑛

第3室（センターゾーン・2号館 2402）

司会 九州共立大学 黒木隆善

1. 副詞節の分類について——分詞構文への拡張可能性

九州大学・院 永松尚子

司会 九州共立大学 黒木隆善

2. tough 構文における DegP の投射について

九州大学・院 知京健真

第4室（センターゾーン・2号館 2401）

司会 福岡大学 森竹希望

1. T to C 移動の拡張の可能性——従属節における透明性の観点から

九州大学・院 中山凌太

司会 九州大学 吉村理一

2. 対格動名詞の統語構造について——null D 分析の妥当性

九州大学・院 白木佳帆

シンポジウム（15時00分～17時30分）

第1部門「イギリス文学」（センターゾーン・2号館 2308）

シェイクスピアの共作／改作劇

司会・講師 志學館大学 高根広大

講師 鹿児島国際大学 小林潤司

講師 鹿児島大学 大和高行

講師 鹿児島国際大学 山下孝子

第2部門「アメリカ文学」(センターゾーン・2号館 2306)

石油的無意識——アメリカ移動文学の再マッピング

司会 長崎大学 鈴木章能

講師 西南学院大学 鈴木一生

講師 関西学院大学 塚田幸光

講師 金沢大学 山口善成

第3部門「英語学」(センターゾーン・2号館 2407)

手がかりの重みづけをめぐる実験音声学的研究

司会・講師 福岡大学 竹安大

講師 北九州市立大学 石橋頌仁

講師 福岡大学大学院特別選抜研究員 神谷祥之介

講師 福岡工業大学 劉莎

懇親会 (18時30分～20時30分)

場所：グローバルホテル糸島コンベンションホール

(会費 7000円 学生 4500円)

第2日 10月25日(日)

(受付はセンターゾーン2号館1階2107にて行います。受付では年会費の納入はできません。)

研究発表 (① 10時00分～10時35分 ② 10時40分～11時15分 ③ 11時20分～11時55分 ④ 12時00分～12時35分)

第1室 (センターゾーン・2号館 2302)

1. 【発表なし】

2. 【発表なし】

司会 九州女子大学 中島久代

3. John Donne の *Satires* における物語的連続性——風刺詩の偽装と水の比喩が示す政治的関与と挫折

島根大学（非常勤） 鳥養志乃

司会 福岡大学 園田暁子

4. 「風にそよぐ葦」の反転——W. B. Yeats, *The Wind Among the Reeds* における Sidhe とアイルランド的霊性

（招待発表）北九州市立大学 木原謙一

第2室（センターゾーン・2号館 2301）

司会 九州大学 中村嘉雄

1. Spatial Collapse: A Topological Analysis of Narrative and Subjectivity in Paul Auster's *City of Glass*

福岡大学・院 カクカイン

司会 福岡女子大学 長岡真吾

2. Translating Women's Voices: "The Yellow Wallpaper" and *The Awakening* in Japanese and Turkish

九州大学・院 大園里美

司会 福岡大学 高橋美知子

3. Urban Space and Mobility in the 1920s: Desire and Disillusion in *The Great Gatsby*

九州大学・院 TANG YUYANG

司会 福岡大学 高橋美知子

4. 『グレート・ギャツビー』における可傷性と被害意識

（招待発表）長崎県立大学 生田和也

第3室（センターゾーン・2号館 2402）

司会 産業医科大学 田中公介

1. 外置構文における Split-Spellout 分析について

九州大学・院 平野湧久

司会 産業医科大学 田中公介

2. 義務的付加詞の統語的分析——英語中間構文・結果構文の統語的性質から

山口大学 久保田舞

司会 熊本県立大学 村尾治彦

3. 英語前置詞 at における状態従事解釈の境界条件——補部名詞句の構造と活動フレームの観点から

福岡大学 石垣恵一

司会 熊本県立大学 村尾治彦

4. 接続表現から談話標識へ：英語 Not to Mention の談話標識化

(招待発表) 九州大学名誉教授 大橋浩

特別講演 13 時 30 分より (センターゾーン・2 号館 2308)

司会 関西外国語大学 西岡宣明

言語研究の進展と言語多様性の探求——文法拡張を可能にする要因について

九州大学名誉教授 稲田俊明

閉会式 15 時 00 分より (センターゾーン・2 号館 2308)

挨拶

支部長・福岡教育大学教授 後藤美映

〈第1日〉10月24日（土）

研 究 発 表

第 1 室（センターゾーン・2号館 2302）

司会 九州大学 西 あゆみ

1. 自分の人生を生きるとは——*The Blue Castle* における Valancy の意思決定と自由意思

福岡大学・院 高橋 ひとみ

L. M. Montgomery の作品である *The Blue Castle*（1926）を女性の意思決定に焦点を当て、自由意思の観点から読み解く。*The Blue Castle* は、Montgomery が、生涯において二冊だけ執筆した大人向け長編小説といわれているものの一つで、一般的には、恋愛小説として分類されている。しかし、ヒロインである Valancy の、大人の女性としての意思決定に焦点を当てた作品という観点から読むことによって、当時のカナダにおける女性の置かれた社会的立場や、家庭内に潜む問題を提起した作品として読み解くことができる。

特に、作品後半における、Valancy の自由意思に基づく意思決定は、John Stuart Mill が、『自由論』（1859）や『女性の解放』（1869）などで提唱した自由意思を体現したものとして考えることができるのではないだろうか。当時のカナダの文化的背景も踏まえつつ、家庭や親戚関係といった、身近なコミュニティにおける女性の不自由さについて、Mill の自由の概念との関係から考察したい。

司会 鹿児島県立短期大学 野田 ゆり子

2. 歌う Lúthien、語られる Arwen——Tolkien 作品における女性表象をめぐって

九州大学・院 松本 康太

The Lord of the Rings において、Aragorn は Sauron の軍勢を打ち破り、人間の王国の王として即位する。Aragorn の栄光とは対照的に、彼の妃となる Arwen にはある種の悲劇性がつきまとう。Aragorn との結婚によって、エルフ特有の不死性を失った Arwen は、夫を亡くした後、一人寂しく生涯を閉じる。勝者の側だったにもかかわらず、なぜ Arwen は寂しい最期を迎えなければならなかったのか。

Aragorn は初めて Arwen を初めて見た時に Lúthien を思い浮かべる。彼女は、Tolkien の韻文作品である *The Lay*

of Leithian に登場するエルフの王女であり、歌を歌うことによって何度も人間の英雄である Beren を救う。Lúthien は Beren と協力して、奪われた宝石シルマリルを冥王 Morgoth から取り返すことに成功する。

本発表は、Lúthien が自らを吟遊詩人になぞらえることに着目し、詩人としての Lúthien の表象について分析する。その上で、常に他の人々によって語られる存在であった Arwen の表象を、Lúthien と比較しながら再検討し、作中における語る/語られることの差異について考察していきたい。

第 2 室 (センターゾーン・2 号館 2301)

司会 九州国際大学 松下 紗耶

1. “Nature held a balance and kept a book”: Rereading *Absalom, Absalom!* from an EcoGothic Perspective

九州大学・院 Hu Wenhui

While William Faulkner’s *Absalom, Absalom!* is often read through history and race, this study rereads it from an ecoGothic perspective, arguing that the fall of Thomas Sutpen’s “design” is less a moral reckoning than a revolt by the nonhuman: the return of a violated yet indifferent nature that keeps an agency of its own. Three strands carry the claim: Sutpen, who drifts ever closer to the nonhuman himself; “butterfly Ellen” and “root Rosa,” two women whom the same stripping of agency folds into the nonhuman; and the slow life of the wood: living trees, felled timber, and the fire that returns the house to ash, shadowing the design’s rise and fall. In the end, what recovers is the nonhuman, not the human order: the land reclaims itself, and the design’s sole heir is the very mixed-race line it tried to deny.

司会 九州国際大学 松下 紗耶

2. 変貌する「物」たち——Toni Morrison の *Jazz* における都市・南部・食

九州大学・院 山口 沙瑛

都市は人、物、文化の集合体であり、一つの生物のように生き生きとした様を見せる。そして都市に溢れる多彩な「物」たちもまた、人に影響を及ぼすほどの生命力を持つ。ニューヨークを舞台とする、Toni Morrison の *Jazz*(1992)では、過剰なほど描かれる「物」たちが単なる背景にとどまらず、一つのアクターとして機能する。本作品は、Joe Trace による若き愛人 Dorcas Manfred の射殺、Joe の妻 Violet による遺体への切り付け事件といった愛憎劇を超え、1860 年代～1920 年代にかけてのアメリカの激動が南部から北部への Great Migration やハーレ

ムルネッサンスを中心に描かれた歴史小説とも言えよう。そうした時空間の変動の中で変わるのは、人だけではない。次々に生み出される「物」たちもまた、人の道具やメタファーとしての役割から脱し、人の行動に影響をもたらす別の「物」へと変貌する。本発表は *Jazz* において、「物」がどのように変容し、登場人物たちの行動や価値観を左右する力を持つに至るのかを解き明かす。

第 3 室 (センターゾーン・2 号館 2402)

司会 九州共立大学 黒木 隆善

1. 副詞節の分類について——分詞構文への拡張可能性

九州大学・院 永松 尚子

本発表の目的は、Haegeman (to appear) で提案された副詞節の 3 分類を再検討し、その適用範囲を分詞構文へ拡張することである。副詞節は中核的副詞節、周辺の副詞節、非統合的副詞節の 3 分類がなされると分析されている。節タイプによって、主節への付加位置や、節内での主節現象の生起の許容性がそれぞれ異なることが観察されてきた。しかし、既存の分類では捉えきれないデータも観察される。そこで本発表では、これらのデータを説明可能とする分類を検討する。さらに、このような分類を副詞節の一種とみられる分詞構文に適用する。分詞構文には、主節主語と同じ解釈を持つ主語が顕在化しないもの、主節主語と異なる解釈を持つ主語が顕在化するもの、主節主語と異なる解釈を持つ主語が顕在化しないものという複数のタイプが存在する。副詞節の分類を精緻化し、分詞構文の主語の顕在化に対して理論的な説明を試みる。

司会 九州共立大学 黒木 隆善

2. tough 構文における DegP の投射について

九州大学・院 知京 健真

知京 (2025) は、tough 構文の主節の主語がその位置に基底生成するという立場 (Ross (1967), Chomsky (1977), Keine and Poole (2017)) を採った上で、tough 構文に Degree Phrase (DegP) の投射が含まれると想定している。さらに、Nissenbaum and Schwarz (2011) の提案に基づき、空演算子 (null operator: Op) が不定詞節から DegP の指定部へと移動する構造を提案している。

本発表では、知京 (2025) の分析を一部修正し、ミニマリストプログラムの枠組みで精緻化する。具体的には、

従来 DegP の関与が指摘されてきた比較構文や too ... to ... 構文などとの比較を通じて、それらとの統一的な説明を試み、tough 構文における DegP の正当性を明らかにする。また、Op の素性照合システムを、探査子・目標 (probe-goal) の一致 (Agree) 関係から理論的に再検討する。

この分析を踏まえ、本発表では、知京 (2025) が扱っていない (1) の非文法性について考察する。(1) は、不定詞節の主語の位置から要素を取り出した形の tough 構文が非文法的であることを示している。

(1) * John is easy [t to like Mary].

(Chomsky (1981: 314))

第 4 室 (センターゾーン・2 号館 2401)

司会 福岡大学 森竹 希望

1. T to C 移動の拡張の可能性——従属節における透明性の観点から

九州大学・院 中山 凌太

本発表は、T to C 移動の分析を再検討し、その適用範囲を従属節にも拡張することで、節の透明性に関する統一的説明を目指すものである。一般に英語では、T to C 移動は主節でのみ観察されるとされるが、Belfast English やアイスランド語では従属節においても T to C 移動が確認される。このような言語・方言の事実は、現代英語においても従属節での T to C 移動を想定する分析の可能性を示唆している。また、節の透明性に関して、定形節は統語操作に対して不透明である一方、非定形節や接続法節は比較的透明であることが知られている。本発表では、従属節における移動や QR などの現象を検討し、これらの透明性の差異を T to C 移動の有無やそのメカニズムによって説明できると主張する。これにより異なる節の間に見られる透明性の違いに統語的な平行性が存在することを示し、節構造に関するより統一的な分析を提案する。

司会 九州大学 吉村 理一

2. 対格動名詞の統語構造について——null D 分析の妥当性

九州大学・院 白木 佳帆

本発表では、英語における対格動名詞の統語構造について、Kastner (2015) の Selected Embedded Presuppositional DP complements に対する分析を援用し、対格動名詞は CP を選択する非顕在的な D(null D) を持つ名詞句であると提案する。本分析では、以下(1), (2)の事象について説明が可能である。対格動名詞は TP である ECM 構文や

CP である *that*-clause とはふるまいが異なり、格位置に生起する。

- (1) a. Mary talked about [John moving out]. (対格動名詞)
b. * Mary talked about [John to move out]. (ECM 構文)
c. * Mary talked about [(that) John moved out]. (*that*-clause) (Pires (2006: 21))

また、対格動名詞は所有格動名詞ともふるまいが異なり、文副詞の生起を認可する。

- (2) a. Mary probably being responsible for the accident was considered by the DA. (対格)
b. *Mary's probably being responsible for the accident was considered by the DA. (所有格)
(Pires (2006: 18))

さらに、対格動名詞が TP や CP ではなく、null D によって率いられる名詞句であるならば、強調構文の焦点位置に生起できると予測可能である。以上の言語事象や予測について、提案した構造を用いて理論的・経験的な説明を試みる。

シンポジウム

第 1 部門「イギリス文学」(センターゾーン・2 号館 2308)

シェイクスピアの共作／改作劇

司会・講師 志學館大学 高根 広大
講師 鹿児島国際大学 小林 潤司
講師 鹿児島大学 大和 高行
講師 鹿児島国際大学 山下 孝子

本企画では、ルイス・ティボルドの『二重の欺瞞』(1728)と作者不詳の『ミュセドーラス』(c.1590)を中心に、シェイクスピアが共作に関与した可能性のある作品や、改作・改訂の過程でその関与が指摘されてきた作品を取り上げる。『二重の欺瞞』は、シェイクスピアとジョン・フレッチャーの共作劇が改作され、さらにティボルドが改作した作品であるとの指摘がある。一方、『ミュセドーラス』は、ルネサンス期に広く親しまれ、近年ではシェイクスピアによる加筆の可能性が議論されている作品である。

「シェイクスピア作品」の境界は、シェイクスピアが活躍していた時代から必ずしも明確ではなく、作品の編纂や改作、受容の歴史の中で変化を続けてきた。近年は共作劇・改作劇研究の進展により、従来は外典や作者不詳劇とされてきた作品にも新たな関心が集まっている。こうした問題意識を共有しながら、成立事情や評価史に加え、作品解釈や人物造形にも目を向け、「シェイクスピア作品」の周縁について議論する。

小林潤司

最近、定年退職したのを機に一念発起し、かつて英文科で学んだシェイクスピアを勉強し直すことにした人がいると想像してみたい。アマゾンで取り寄せた一卷本全集の最新版を開いて見ると、なじみ深い作品に交じって、見慣れない標題が並んでいるのに驚くだろう。『フェヴァシャムのアーデン』、『エドワード三世』、『二重の欺瞞（カーディニオー）』等々。かつては「作者不詳劇」^{アノニマス}、「シェイクスピア外典」^{アポクリファ}に分類されていた膨大な作品群の一部が「共作劇」^{コラボラティブ}として、事実上「正典」^{キャンオン}認定されているのだ。一念発起氏が英文学から離脱していた期間にシェイクスピア研究の世界にいったい何が起こっていたのか？

この間の転回は、研究の現場にいる人間にはかえってその真の意義が感知されにくい性質のものだったようにも思う。第一フォリオ版全集（1623）を起点とするシェイクスピア編纂史の文脈を踏まえて、この転回を振り返りつつ、「これから」を展望してみたい。

「シェイクスピア」改作劇——シオボールドの『二重の欺瞞』(*Double Falsehood or, The Distressed Lovers*, 1728)、ドライデンとダヴェナントの『あらし』(*The Tempest, or The Enchanted Island*, 1677)を中心に——

大和高行

本発表では、先ず、シェイクスピア全集の編纂者として知られるルイス・シオボールドが「献辞」の中でシェイクスピアの遺稿に基づく改作劇だと主張する『二重の欺瞞』に関する著作そのものを問題にし、それをジョン・ドライデンとウィリアム・ダヴェナントによる改作版『あらし』の「序文」でのドライデンの主張と対比させる。これにより、「シェイクスピア」効果というものについて考える。次に、これらの劇に見られる「フレッチャーらしさ」——『二重の欺瞞』第4幕第2場の劇作法と『あらし』における誤解>危機>和解への展開設定と軽妙さといったトラジック・コメディのパターン——を確認し、「フレッチャー」の再評価を試みる。その作業を経て、最終的には、王政復古期から連綿と続く「シェイクスピア」崇拝が現在に至るまで英国帝国主義を支えているありようを確認することになるだろう。（本研究は JSPS 科研費基盤 B(23K25311)ならびに JSPS 科研費基盤 C(25K0395 1)の助成を受けたものです。）

『二重の欺瞞』の結末をめぐる——ヴィオランテ表象とエピローグの弁解

山下孝子

本発表は、『二重の欺瞞』におけるヴィオランテの表象に注目し、シェイクスピアの他作品との比較検討を試みる。ヴィオランテは性暴力の被害者でありながら、加害者との婚姻によって物語が収束する。これは、『ルークリースの凌辱』や『タイタス・アンドロニカス』といった悲劇的作品において、性暴力の被害が復讐や死を伴う破壊的な帰結へと結びつく構図とは大きく異なる。むしろ、『二重の欺瞞』をシェイクスピアの悲喜劇的ジャンルの作品群との関連で考えるなら、女性の名誉と婚姻をめぐる問題との結びつきという点で、『終わりよければすべてよし』のヘレナやダイアナとの連続性が認められるかもしれない。また、この劇に付されたエピローグにおいて、ヴィオランテが嘆くのは「凌辱されたからではなく、捨てられたからだ」と弁明されるが、その補足

がこの結末をどのように正当化しようとしているのかを検討し、それによってヴィオランテ表象がかき立てる問題性を考察したい。

『ミュセドーラス』における階級上昇の夢

高根廣大

作者不詳の喜劇『ミュセドーラス』(c.1590)は、70年間で少なくとも17回も出版された人気の喜劇である一方で、従来は低俗なロマンス劇として評価され、精読対象としての関心は集めてこなかった。近年はシェイクスピアによる加筆の可能性が議論される Q3 (1610) を中心に関心が集まっているが、加筆された部分は一部にすぎない。

本発表では、まずエピローグで称えられる「女性の行為 (a woman's deeds)」に注目し、アラゴンの王女アマダインがミュセドーラスの身分ではなく人間性を愛するという点に、作中で焦点が当てられていることを指摘する。その上で、『ミュセドーラス』がアマチュア劇団向けに出版されていたことから、特に Q1 (1598) では最後まで王子としての身分が明かされないミュセドーラスに対して、観客だけでなく役者までも、秘められた特別な自分への期待を寄せられるように描かれていることを主張する。また、タイトルページでも魅力を強調されているネズミの階級上昇についても考察する。

第2部門「アメリカ文学」(センターゾーン・2号館 2306)

石油の無意識——アメリカ移動文学の再マッピング

司会・講師 長崎大学 鈴木 章能

講師 西南学院大学 鈴木 一生

講師 関西学院大学 塚田 幸光

講師 金沢大学 山口 善成

アメリカ文学の特徴の一つとしてロード・ナラティヴがある。移動(旅・放浪・逃走)を物語の骨格とし、道程そのものを通じて主体・社会・国家を批評する物語形式である。移動は、フロンティア神話、個人主義、自由と逸脱、自律、変革、不安定、過去の栄光や神話の再発見と回復の希望など、様々なアメリカ的価値観に絡めて語られてきた。もっとも、ロード・ナラティヴの多くが自動車やバイクをはじめとする長距離移動であることに注目するとき、アメリカ的価値観を表象すると見られる物語は石油ならびにその大量消費によって支えられている。すなわち、多くのロード・ナラティヴは、石油によって成立するエートスが描かれた物語、言ってみれば、ペトロ・フィクションないしオイル・ナラティヴである。

そこで、本シンポジウムでは、石油をマルクスのな下部構造と見て、アメリカのロード・ナラティヴを石油の発見によってもたらされた権力と経済的資本や政治の文脈の中で再マッピングする、あるいはロード・ナラティヴに貼りつけられてきた様々な人間中心主義的ないしアメリカ的な意義や価値観について自然や環境、生命

の視点から再考する。アメリカには、長距離移動を描く文学作品が数多く存在する。フロアの皆様のご専門とも結びつけながら、有意義な意見交換ができれば幸いである。

アメリカン・マインドの燃料——ロード・ナラティヴにおける自由の神話と石油的無意識

鈴木章能

かつて廃棄物とみなされていたガソリンが国民的燃料へと組み替えられた 20 世紀初頭、アメリカでは、自動車による移動の物語が始まった。その移動には、自由や民主主義といった価値観が付与されたり、非人間的であるというレッテルが貼られたり、ロマンスや悲劇の様相をまったりしてきた。自動車表象そのものに着目すると、第二次世界大戦前は比較的批判的な表象 (*The Grapes of Wrath*, *Light in August*, *Tobacco Road* ほか) が多く、戦後は比較的肯定的、あるいは無関心ともいえる表象 (*The Air-Conditioned Nightmare*, *On the Road*, *Lolita*, *Zen and the Art of Motorcycle Maintenance* ほか) が多いという傾向が見られる。だが、それらを支える石油的無意識に目を向けると、Tom Joad が母に語る超越的な台詞が石油システムを隠蔽していること、また、環境文学とみなされる *The Dharma Bums* において、自家用車が不要なガラクタのリストから除外されていることなどに疑問が生じる。本発表では、Sinclair Lewis の *Free Air* (1919) をアメリカの石油美学の嚆矢と捉え、アメリカ社会における石油をめぐる政治経済の観点から、現代に至るまでのいくつかの作品を新歴史主義的に再考し、国民的・階級アイデンティティが石油を不可視化するアメリカン・マインドを探究する。

超絶した白さがもたらす融合——ケルアックの『路上』とメルヴィルの『白鯨』

鈴木一生

ロード・ナラティヴの代名詞 Jack Kerouac の *On the Road* (1957) について語るとき、同作品は Herman Melville が 19 世紀の海と帆船で描いた *Moby-Dick* (1851) を、1940 年代後半の路上と自動車で換骨奪胎した物語であると定義しても言い過ぎにはならないだろう。ケルアックは知人への書簡のなかで自身をメルヴィルになぞらえ、『路上』を「メルヴィルのなもの」と記している。実際、1951 年に執筆された草稿では、語り手サルが自分のことをイシュメールだとみなしているし、1957 年版でもスピード狂ディーンは「いかれたエイハブ」であり、頻出する白いモチーフ、とりわけサルとディーンがメキシコへ向かう道中で遭遇する白い幽霊のような馬は、否応なしに『白鯨』第 42 章で展開される白さについての思索へと読者を誘う。『路上』と『白鯨』の影響関係をめぐる研究に先鞭をつけた Mark Dunphy は、両作品が“self-transcendence”と“self-transformation”の物語であるという。本発表では、石油や鯨油が他者との融合を促し、サルあるいはイシュメールを白人以外の人種やヘテロセクシャルではない愛のかたちへと変態させる可能性を示してみたい。

ペトロ・オクトパス——ロード、パイプライン、『ゼア・ウィル・ビー・ブラッド』

塚田幸光

パイプラインが広大な西部を横断する。そこでは木々が伐採され、掘削塔が林立し、人間は巨大な産業システムの一部でしかない。果たして、パイプラインとは、メタフォリカルなオクトパスなのか。ロングショットが捉えるのは、自然と人工の境界が曖昧になった油まみれの黒い西部であり、石油が作り替えた近代の地図だろう。

Paul Thomas Anderson の *There Will Be Blood* (2007) は、石油が資本主義の回路に接続され、共同体を破壊する 20 世紀初頭のアメリカ西部の風景を描いているのだ。

本発表では、*There Will Be Blood* を軸に、パイプラインとロードの相補的關係性について論じる。フロンティアが資源インフラとなり、西部が再定義されるなかで、ロードは如何にしてその意味を変えていくのか。アメリカン・ロードの前史に関して、パイプラインという視座からペトロ・フィクションを考察する。

うわのそらの旅行者たち——Walter Kirm, *Up in the Air* における空路の旅と石油的無意識

山口善成

本報告は従来、自動車や路上を中心に理解されてきたロード・ナラティヴを航空機による移動へと拡張し、空路のクロノトープの有する現代的な意義を考察する試みである。空路の旅は我々現代人の時間・空間感覚を拡張し、また行動の自由度を飛躍的に高めた。その一方で、航空機ほど厳格な制度や規則によって管理され、均質化された移動手段はほかにない。本報告はこのように矛盾に満ちた空路の旅が日常化した現代における人間像の典型を、Walter Kirm, *Up in the Air* (2001) や同時期の諸小説に描かれた「うわのそら」の旅行者たちに見出す。*Up in the Air* は彼らのライフスタイルが石油燃料の大量消費によって支えられているにもかかわらず、その事実を意識の外へ追いやる衝動、いわば「石油的無意識」とも呼ぶべき心理作用の働きを暗に示唆している。本報告では、航空産業や米国の石油開発をめぐる歴史的事実を適宜参照しながら、このような石油的無意識が現代のロード・ナラティヴの根底に存在している可能性を提示する。

第3部門「英語学」(センターゾーン・2号館 2407)

手がかりの重みづけをめぐる実験音声学的研究

司会・講師 福岡大学 竹安 大

講師 北九州市立大学 石橋 頌仁

講師 福岡大学大学院特別選抜研究員 神谷 祥之助

講師 福岡工業大学 劉 莎

音素の弁別には複数の音響的手がかりが存在し、1つの音韻的対立に対して複数の手がかりが結びつくことが一般的である。こうした音声産出・知覚における手がかりの相対的重要度(重みづけ)は言語によって異なり、外国語や方言など、自身の母語以外の言語の習得においてしばしば発音や聞き取りの困難さを引き起こす。さらに、同一言語内であっても手がかりの重みづけが一定であるとは限らず、世代差や個人差が存在することも指摘され始めている。本シンポジウムでは、こうした音声産出・知覚における手がかりの重みづけの観点から、母語の獲得や第二言語習得、方言における音変化などの幅広い領域における現象をどのように位置づけ、相互に関連付けるべきかを議論する。

音声産出・知覚における手がかりの重みづけ：理論的基盤と研究手法の展望

竹安大

音素の弁別には複数の音響的手がかりが存在し、1つの音韻的対立に対して相対的重要度の異なる複数の手がかりが結びつくことは広く知られた事実である。ただし、こうした事実をどのように解釈するのかについては、研究者間で様々な見解の相違がある。本発表では、まず、音声産出・知覚における手がかりの重みづけを議論するために用いられる研究デザインや手法を紹介し、本シンポジウムにおける議論の基盤を提供する。さらに、手がかりの重みづけが人間の音声産出・知覚メカニズムを解明する上でどのような意義を持つのかについて、既存の有力な複数の理論的枠組みによる解釈を紹介しながら議論する。

柳川方言における有声性の音変化——産出と知覚の非対称を第二言語習得の枠組みから考える

石橋頌仁

柳川方言は、東京方言をはじめとする多くの言語で忌避される有声重子音を語彙的に有している。この有声重子音は、閉鎖区間中の声帯振動を主要な手がかりとして音声産出・知覚がなされる。本発表は、柳川方言において、この有声性対立が世代を追ってどう変化しつつあるかを音声産出・知覚の両面から検討する。筆者は柳川方言話者を対象に調査を行い、その音声産出・知覚実験の結果、産出では高年層では有声重子音の閉鎖区間中の声帯振動が維持されていた一方、若年層では閉鎖区間中の声帯振動の維持が弱まっていることを明らかにした。さらに知覚では、全世代で一貫して声帯振動が有声重子音の主要な手がかりであった。すなわち、音声産出は変化しつつある一方で、音声知覚においては変化が観察されなかった。本発表では、この産出と知覚の間の非対称をどう理解すべきかを、手がかりの重み付けと第二言語習得の知見を手がかりに議論する。

第二言語習得の枠組みから考える音変化——鹿児島方言と東京方言の方言併用について

神谷祥之介

従来の鹿児島方言は、韻律体系や音声的持続時間の制御において、大部分の日本語諸方言とは異なる特徴を示す。しかし近年、方言接触の増加に伴い、鹿児島方言の韻律体系には東京方言の影響を受けた変化が観察されている。また、現代の鹿児島方言話者は、状況に応じて両方言のアクセント型を使い分けるバイリンガルの性質を持つことも報告されている。筆者はこれまで、こうした変化や方言の併用の影響が、促音の持続時間の制御にも及ぶのかを実験音声学的立場から検討してきた。その結果、現代の鹿児島方言話者の促音の時間制御には、産出・知覚の両面で東京方言の影響を受けた変化が認められた。さらに、方言間のアクセント型の切り替えは可能でも、持続時間の制御のパターンは使い分けていないことが示唆された。本発表では、これらを踏まえ、鹿児島方言の音変化を既存の体系の「喪失」ではなく新たな体系の「習得」と捉える分析の可能性を議論する。

英語の閉鎖音の有声・無声対立における手がかりの重み付け——同時バイリンガリズムの影響

劉莎

本研究は、同時バイリンガル（2L1）とモノリンガル話者における、英語閉鎖音の有声・無声対立知覚における VOT および語頭 F0 の手がかり重み付け（cue weighting）の違いを検討する。対象は、日本語-英語 2L1（JE 群）、中国語-英語 2L1（ME 群）、および英語モノリンガル各 6 名である。単語リストおよび短文音読タスクを

用いてデータを収集し、ロジスティック回帰分析を行った。その結果、モノリンガル群と JE 群では VOT（単語リスト）および語頭 F0（短文音読）に有意差が見られた。一方、モノリンガル群と ME 群では VOT に差が見られたが、語頭 F0 には差が認められなかった。

日本語と英語では VOT および語頭 F0 が閉鎖音対立の知覚において類似した役割を持つため、JE 群ではこれらの手がかり重み付けの再構成が生じやすい。一方、中国語では語頭 F0 の役割が限定的であるため、ME 群は英語閉鎖音知覚においてモノリンガル話者と類似した語頭 F0 への重み付けを示したと考えられる。以上の違いは、2L1 話者が二言語の音韻カテゴリーを区別する必要性に応じて、手がかり重み付けを調整していることに起因すると考えられる。

〈第1日〉10月25日（日）

研 究 発 表

第 1 室（センターゾーン・2号館 2302）

1. 【発表なし】

2. 【発表なし】

司会 九州女子大学 中島 久代

3. John Donne の *Satires* における物語的連続性——風刺詩の偽装と水の比喩が示す政治的関与と挫折

島根大学（非常勤） 鳥養 志乃

John Donne の *Satires* は 1590 年代に創作された長編風刺詩群である。*Satires* の 5 作品については従来、各作品を独立した風刺詩として扱う読みが主流である一方、Hester は語り手の宗教的發展を描く五幕構成として解釈している。Baumlin はこうした物語的読みには慎重である一方、修辞や主題の統一性を認めている。本研究は、*Satires* が扱う「風刺詩の創作を含む政治的関与」に注目し、この詩群に内在する物語的連続性を明らかにする。すなわち、語り手が風刺詩の創作から宮廷での請願に至るまで政治的関与を試みるも、繰り返し挫折する過程が描かれる点を指摘する。“Satire 1”と“Satire 2”では風刺詩禁止法の時代背景が語り手の風刺詩に偽装を強いて、“Satire 3”以降は海や川といった水の比喩が権力の圧力を象徴する。5 作品間で語り手は風刺詩の創作から宮廷での請願へと行動を移すも、最終的に宮廷の腐敗と賄賂の構造に直面し、政治的挫折に至る。以上より、詩群全体が「個人と権力」の問題を物語として描く点を示す。

司会 福岡大学 園田 暁子

4. 「風にそよぐ葦」の反転——W. B. Yeats, *The Wind Among the Reeds* における Sidhe とアイルランド的靈性

（招待発表）北九州市立大学 木原 謙一

本発表は、W. B. Yeats の詩集 *The Wind Among the Reeds* を、単なる「ケルトの薄明」的幻想詩集としてではな

く、十九世紀末アイルランドにおける文化的アイデンティティ確立の詩的戦略として読み直すものである。同詩集において妖精・精霊世界への誘いは、初期詩に見られる逃避的な“come away”の呼びかけを継承しつつも、より攻撃的・召集的な響きを帯びている。とりわけ“The Hosting of the Sidhe”に顕著な軍事的語彙は、Sidheを単なる幻想的存在ではなく、土地に蓄積された民族的記憶とアイルランド的霊性の顕現として示す。本発表では、詩集題名に含まれる“wind”をイエイツ自身の注に基づきSidheの風と捉え、“reeds”をその風を受けて震え、音を発するアイルランドの表象として読む。さらに、この題名が聖書の「風にそよぐ葦」を想起させつつ、そのキリスト教的・合理主義的象徴を反転し、揺らぎそのものをアイルランド的霊性の感受性として再価値化していることを論じる。

第 2 室 (センターゾーン・2 号館 2301)

司会 九州大学 中村 嘉雄

1. Spatial Collapse: A Topological Analysis of Narrative and Subjectivity in Paul Auster’s *City of Glass*

福岡大学・院 カクカイン

This paper uses “narrative topology” to re-read Paul Auster’s *City of Glass*, shifting focus from traditional psychological tropes toward the structural mechanics of space. The protagonist Quinn’s identity crisis is not merely a mental collapse; it manifests as “spatial dimensional collapse,” where the depth of reality disintegrates as his detective logic constricts. By borrowing topology to analyze narrative progression, I establish a direct analogy between topological transformation and narrative rupture. Quinn’s investigative practices warp the urban environment, forcing his trajectory into a non-orientable loop where the tracker and the tracked converge. Ultimately, this study reveals that the character subject is not an independent self, but a “narrative construction” trapped within the structural logic of his own framework, consumed by the narrative space. Moving beyond binary oppositions, this paper offers a fresh perspective on the intersection of interdisciplinary inquiry and postmodern narrative.

司会 福岡女子大学 長岡 真吾

2. Translating Women’s Voices: “The Yellow Wallpaper” and *The Awakening* in Japanese and Turkish

九州大学・院 大園 里美

This study focuses on Japanese and Turkish translations of American feminist literature and aims to examine differences in these texts from gender perspectives. Although previous studies have examined English-Japanese, English-Turkish texts, little research has been done analyzing all three texts.

Linguistically, English, Japanese, and Turkish have different ways of expressing gender. For instance, Japanese has various first-person pronouns and ways of speaking depending on the speaker's gender, while English and Turkish do not show the difference in the same way. In addition, culturally, America, Japan and Turkey have developed through different historical backgrounds and thus have different perspectives towards gender. These linguistic and cultural differences greatly affect the different word choices and nuances in each translation.

Focusing on works such as “The Yellow Wallpaper” and *The Awakening*, this research will conduct a comparative textual analysis of women's voices across English, Japanese, and Turkish both linguistically and culturally and aims to contribute to the field of gender, language and translation.

司会 福岡大学 高橋 美知子

3. Urban Space and Mobility in the 1920s: Desire and Disillusion in *The Great Gatsby*

九州大学・院 TANG YUYANG

This study examines representations of urban space and mobility in American literature of the 1920s through the lenses of spatial narrative theory, city history, city planning theory, mobility studies, and thing theory. Focusing on F. Scott Fitzgerald's *The Great Gatsby*, it explores how cities function as sites of desire, modernity, and eventual disillusion. The study argues that urban spaces are not passive settings but active forces produced through human movements and social relations. At the same time, modern cities acquire a form of “thingness” that exceeds individual understanding and control, shaping characters' identities, relationships, and experiences. By analyzing the interaction between body, city, and mobility, the study demonstrates how literary representations of urban life reveal the promises and contradictions of modernity, exposing both the attraction of metropolitan culture and the alienation embedded within it.

司会 福岡大学 高橋 美知子

4. 『グレート・ギャツビー』における可傷性と被害意識

(招待発表) 長崎県立大学 生田 和也

『グレート・ギャツビー』の物語は、“In my younger and more vulnerable years”というフレーズから始まる。ここで用いられる“vulnerable”という語は、語り手ニック・キャラウェイの精神的な傷つきやすさを示すものとして解釈されてきた。しかし vulnerable という語には、傷に伴う身体と精神、能動と受動、そして被害と加害の双方のイメージが内包される。また可傷性 (vulnerability) は、自己と他者との関係性を再考するための倫理的観点として重要視されてきた。本発表では近年の人文・社会科学分野における可傷性への関心をふまえ、小説の冒頭部で用いられる“vulnerable”という語を傷つきやすさの自己演出と解釈し、そこから生じるニックの被害意識を指摘する。またそのようなニックの語り、アメリカの被害意識文化と接続されうるかを検証したい。

第 3 室 (センターゾーン・2 号館 2402)

司会 産業医科大学 田中 公介

1. 外置構文における Split-Spellout 分析について

九州大学・院 平野 湧久

本発表では、外置(Extraposition)構文の派生について、Chomsky (2000, 2001)の Phase 分析を基に派生を検討する。以下の(1b)は主語名詞句に、(2b)は目的語名詞句に外置を適用した例である。

(1) a. [A review of this article] came out yesterday.

b. [A review _] came out yesterday [of this article].

(2) a. John read [a paper of Chomsky's] over the summer.

b. John read [a paper _] over the summer [of Chomsky's]. (Tanaka (2011: 175))

ここでは同一の Phase 内で Copy 形成が行われた要素に対して、外置を適用される修飾要素が、修飾対象の NP/DP と異なった位置で Spellout されると提案する。

この分析は、West Ulster English において観察される数量詞遊離の例からも支持される可能性がある。以下(6)には数量詞の *all* が派生の途中位置に残留する例を示している。

(3) West Ulster English *all* -stranding in clause edge

a. Where_k do you think [CP [t_k all]_j they'll want to visit t_j]?

b. Who_k did Frank tell you [CP [t_k all]_j that they were after t_j]?

c. What_k do they claim [CP [t_k all]_j (that) we did t_j]?

(McCloskey (2000, ex. 9), slightly modified)

Chomsky (2000)以降、Phase を計算単位とする派生では Phase Impenetrability Condition (PIC)が議論されてきた。本発表は外置構文の派生が PIC に基づく義務的な移動、同一 Phase 内における Copy 形成、そしてその Split-

Spellout から派生すると主張する。

司会 産業医科大学 田中 公介

2. 義務的付加詞の統語的分析——英語中間構文・結果構文の統語的性質から

山口大学 久保田 舞

本発表は、英語の中間構文や結果構文などに現れる義務的付加詞の統語的性質を検討する。従来の統語研究では、文中の要素は項と付加詞に区別され、省略、反復、弱い島からの抜き取りの可能性などがその診断として提案されてきた。しかし、英語にはこの二分法では捉えきれない要素が存在する。たとえば、Mary behaved badly、Cotton shirts iron quickly、The joggers ran their Nikes threadbare における *badly*, *quickly*, *threadbare* は、その統語範疇や意味役割は付加詞的であるにもかかわらず、省略が不可能である。本発表では、このような義務的な付加詞に、省略、反復、移動といった診断操作を適用し、それらの統語的性質を整理し、その診断結果が、一見互いに矛盾するものであることを指摘する。その上で、項/付加詞の区分は、動詞からの意味的要請と統語的要請という独立した要因から導かれると想定し、矛盾する診断結果の説明を試みる。さらに、義務的付加詞が文の解釈、特にラベリングにどのように貢献するかを検討する。

司会 熊本県立大学 村尾 治彦

3. 英語前置詞 at における状態従事解釈の境界条件——補部名詞句の構造と活動フレームの観点から

福岡大学 石垣 恵一

本発表は認知言語学の立場から、とくにイメージスキーマとフレーム意味論を手がかりとして、英語前置詞 *at* が物理的場所ではなく「活動への参与状態」を表す条件を考察する。前置詞 *at* は典型的には対象を場所に点的に位置づける関係スキーマを持つが、本発表ではその拡張を単なる空間から抽象への移行としてではなく、補部名詞句が喚起する活動フレームとの相互作用として捉える。*at school*, *at work*, *at practice* のような自然な表現を、*?at baseball*, *?at pool* という境界例と、さらに *at the pool*, *at a baseball game*, *at baseball practice* と比較し、制度的参与状態、時間的境界性、デフォルト参与役割、名詞句構造が状態従事解釈を支える要因として働くことを論じる。特に、*school*, *work*, *practice* では上位の活動参与状態が形成されやすい一方、*baseball* や *pool* では参与役割や場所性が競合する点に注目する。場所解釈と活動参与解釈の分岐を、前置詞単独ではなく補部名詞句との相互作用から捉える点に特徴がある。

4. 接続表現から談話標識へ：英語 Not to Mention の談話標識化

(招待発表) 九州大学名誉教授 大橋 浩

談話標識研究は、共時的には多機能性や談話機能と生起位置との関係について、語用論や談話分析、会話分析などの観点から検討が進められてきた。一方、歴史的研究では、文法化研究の発展以降、意味変化の方向性、変化の動機づけ、構文化などの観点から談話標識機能の発達が論じられている。英語の接続表現には in addition to NP や instead of NP のような補部を伴う形式から、in addition や instead という独立した談話標識用法を発達させているものがある。発達の過程では、補部の省略を伴う中間的用法が橋渡しとなり、文頭での使用の増加とともに談話管理機能が強化されたと考えられる。同様の発達は名詞句や that 節を伴う not to mention にも認められ、コーパスでは補部を伴わない独立用法の存在が確認される。本発表では、使用基盤通時的構文理論の立場から、談話標識用法の発達を構文化として捉え、生起位置と談話機能との相互作用に着目しながら、not to mention の談話標識への構文化を動機づける機能的・談話的要因について考察する。

特 別 講 演 (センターゾーン・2号館 2308)

司会 関西外国語大学教授 西岡 宣明

演題 言語研究の進展と言語多様性の探求——文法拡張を可能にする要因について

講師 九州大学名誉教授 稲田 俊明 (いなだ としあき)

講演内容

言語研究の焦点は、個別の構文の説明を超えて、言語の一般的特性の探究へと進展しているが、その理論的課題について検討する。経験科学における「漸進的研究プログラム」は、伝統的な問題を究明するだけでなく、“新しい問いを立ててより深い説明を求めて進展する研究”である。そのような観点から見ると、言語の普遍的特性の究明だけでなく、多様性にかかわる問題の探究、例えば、特殊構文を生み出す文法の仕組みや規則違反に見え

る事例の原理的説明は、研究課題として残されている。本講演では、日本語と英語の興味深い事例を見ながら、言語の多様性や可変可能性の探究においてどのようなアプローチが妥当であるかを探りたい。また、文構造や文解釈の仕組みに関わる「非明示的要素」の認知や、近年の生成文法の基本設計において注目されている言語固有ではない「第3要因」についても考察したい。

講師紹介

九州大学名誉教授、日本英語学会顧問。1989年『補文の構造』で市河賞を受賞。英語学、言語学分野、特に生成文法の統語論、構造と意味のインターフェイスに関わる問題などを研究している。近年は、英語と日本語の特殊構文の相違など言語の可変可能性に関する問題を探究している。

主著書: 『補文の構造』 (大修館書店、1989年)、『生成文法』 (岩波書店、1998年 (中島、外池、福井と共著)) など。主要論文: What Wh-Echo Questions Tell Us about the Architecture of the Language Faculty (Chiba, S. et al. (eds.) *Empirical and Theoretical Investigations into Language*. Kaitakusha. (2003 今西典子と共著)、「動的文法理論と言語獲得モデル」 *Second Language*, Vol. 23, The Japan Second Language Association. (2024). 「節タイプの認可とゼロ関係節の生起条件—非明示的要素の認可」、『福岡言語学会50周年記念論集』 (開拓社、2024).